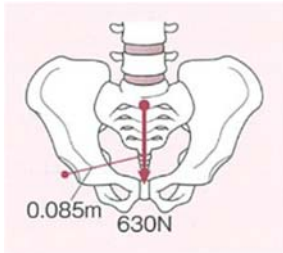
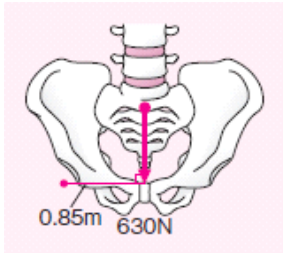
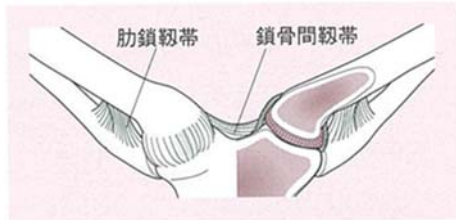
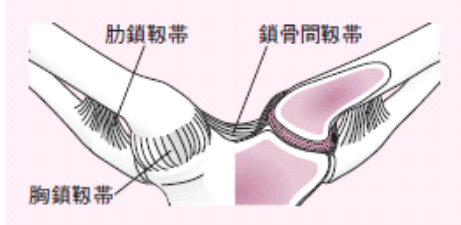
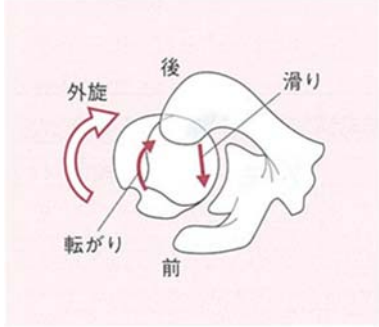
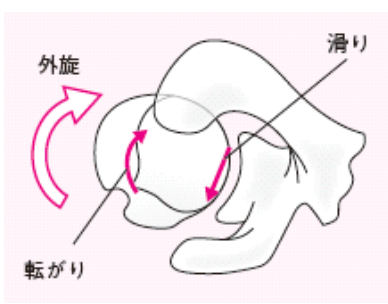
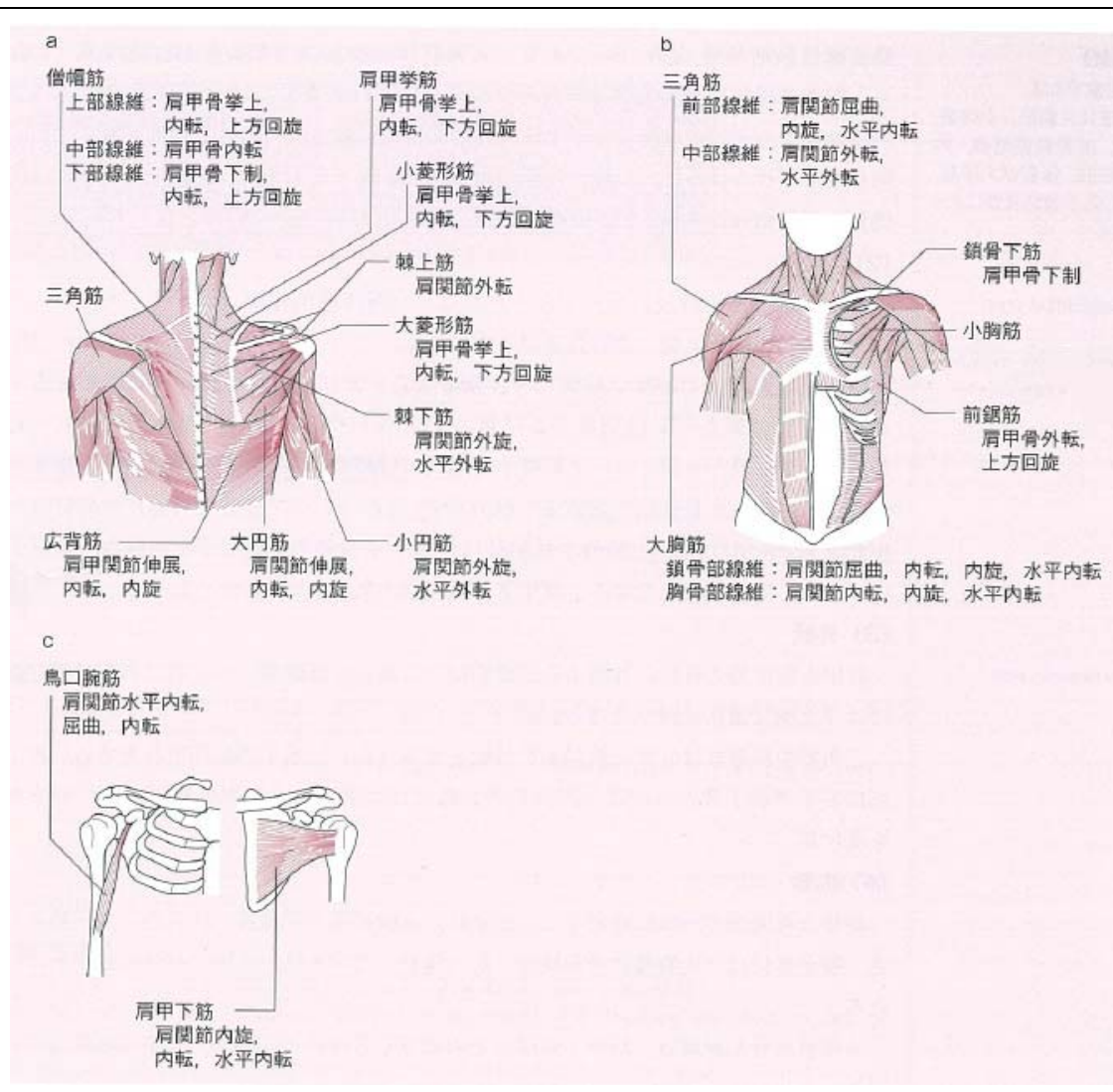


■初版第1刷をお持ちの方

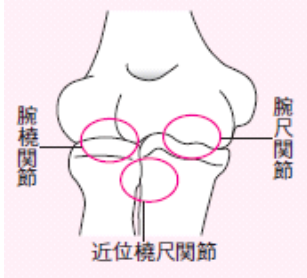
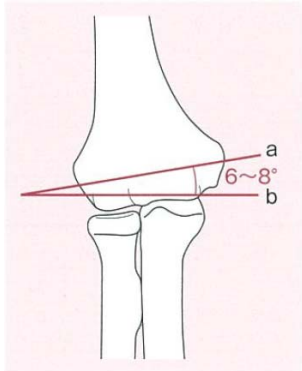
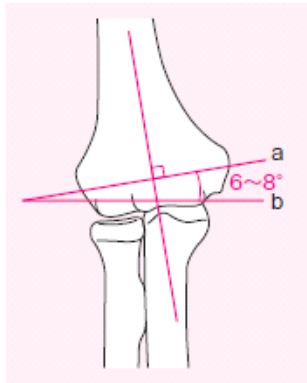
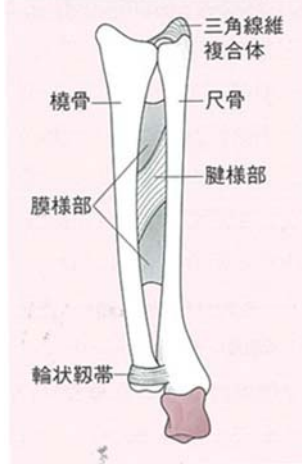
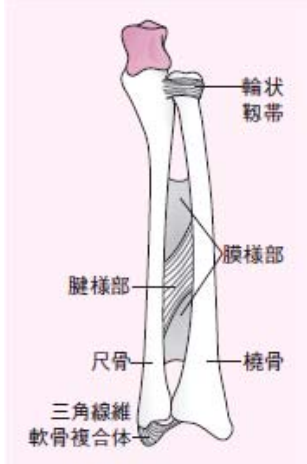
頁・箇所	誤	正
vii (Lecture 3)	<u>肩関節複合体</u>	肩複合体
vii (Lecture 3 4. 3))	<u>肩関節</u> の安定性に関する筋群	肩甲上腕関節の安定性に関する筋群
ix (Lecture 5 Step up)	1. 手関節部の末梢神経障害 1) <u>正中神経麻痺</u> 53 2) <u>尺骨神経麻痺</u> 53 2. 手の変形 6) 尺側偏位 53	1. 手関節部の末梢神経障害 1) 手根管症候群 53 2) ギオン管症候群 53 2. 手の変形 6) 尺側偏位 54
x (Lecture 7 4.)	4) <u>股関節内旋筋</u>	4) 膝関節内旋筋
x (Lecture 7 Step up)	<u>前方引き出しテスト (Anterior drawer test)</u> <u>／Lachman test</u> <u>後方引き出しテスト (Posterior drawer test)</u>	前方引き出しテスト／ラックマンテスト 後方引き出しテスト
P7 サイドノート		
P16 上から6行目	<u>緊張力</u>	筋張力
P22 サイドノート	(追加)	肩複合体 (shoulder complex)
P22 1, 2, 6, 7行目	<u>肩関節複合体</u>	肩複合体
P23 図6	 図6 胸鎖関節	
P24 2)	<u>肩関節複合体</u> の靱帯，関節包，その他の構成組織	肩複合体の靱帯，関節包，その他の構成組織

P26 3.	<u>肩関節複合体</u> の関節運動	<u>肩複合体</u> の関節運動
P27 図 15	 図 15 肩甲上腕関節(右)の外旋運動の際に起こる関節包内運動	
P28 4.	<u>肩関節複合体</u> の運動に関与する筋	<u>肩複合体</u> の運動に関与する筋
P28 (2) 下制 3 行目	鎖骨下神経	鎖骨下 <u>筋</u> 神経
P28 下から1行目	長 <u>筋</u> 神経	長 <u>胸</u> 神経
P29 図 17	(誤)	



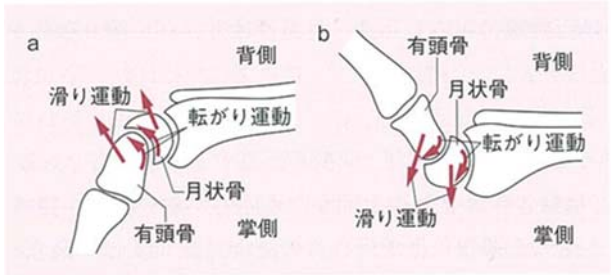
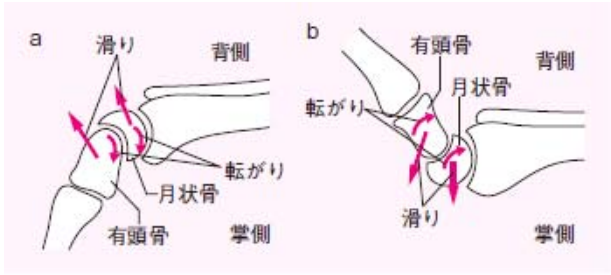
(正)

	a 僧帽筋 上部線維：肩甲骨挙上、内転、上方回旋 中部線維：肩甲骨内転 下部線維：肩甲骨下制、内転、上方回旋 肩甲骨挙筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 三角筋 前部線維：肩甲骨挙上、内転、下方回旋 中部線維：肩甲骨内転 後部線維：肩甲骨下制、内転、上方回旋 小菱形筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 棘上筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 大菱形筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 棘下筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 広背筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 大円筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 小円筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 b 三角筋 前部線維：肩甲骨挙上、内転、下方回旋 中部線維：肩甲骨内転 後部線維：肩甲骨下制、内転、上方回旋 鎖骨下筋 肩甲骨下制 小胸筋 肩甲骨外転、下方回旋 前鋸筋 肩甲骨外転、上方回旋 大胸筋 鎖骨部線維：肩甲骨挙上、内転、下方回旋 胸骨部線維：肩甲骨挙上、内転、下方回旋 c 烏口腕筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋 肩甲骨下筋 肩甲骨挙上、内転、下方回旋	
P31 表1 タイトル, 4, 5, 6 行目	肩関節	肩甲骨上腕関節
P31 表1 右の列下の行	三角筋, 上腕二頭筋長頭および短頭, 烏口腕筋, 大胸筋, 上腕三頭筋長頭	三角筋, 上腕二頭筋長頭および短頭, 烏口腕筋, 大胸筋, 上腕三頭筋長頭
P34 下から4行目	上腕骨の長軸に対して6~8° 外反位をとる(図4).	上腕骨の長軸に直交する線(内側上顆と外側上顆を結んだ線)に対して6~8° 外反位をとる(図4).
P34 下から1~2行目	また、尺骨の滑車切痕は楕円形で、尺骨長軸に対して30° 前方に回旋している(図5).	また、尺骨の滑車切痕は楕円形で、上腕骨の長軸に対して30° 前方に回旋している(図5).

P34 図1		
P34 図4		
P37 図12		
P37 3) 三角線維複合体, その1行目, その6行目, 図13図ネーム, サイドノート (合計4箇所)	三角線維複合体	三角線維軟骨複合体
P37 サイドノート MEMO 2行目	ulnar plus <u>varianse</u>	ulnar plus variance
P37 図15 キャプション (Type II)	滑車溝軸が顆間軸に対して外上方から <u>内下方</u> に向かうもの	滑車溝軸が顆間軸に対して外上方から 外下方 に向かうもの
P38 上から10行目	<u>橈</u> 骨頭に対して凹の法則で動く. 回内時は橈骨	尺 骨頭に対して凹の法則で動く. 回内時は橈骨

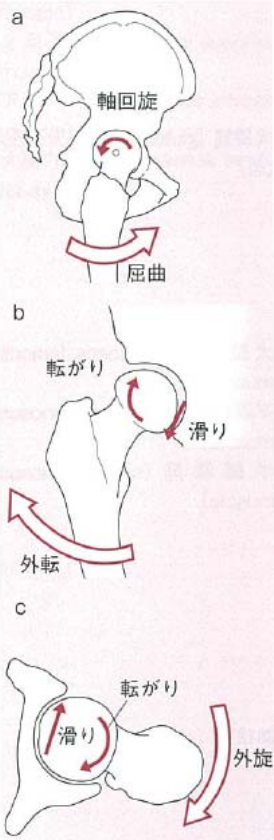
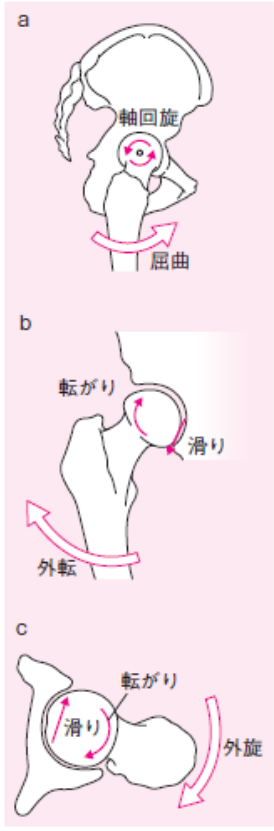
	の尺骨切痕が <u>腹側</u> に転がり運動と滑り運動がみられ,	の尺骨切痕が <u>掌側</u> に転がり運動と滑り運動がみられ,
P38 図 16 出典	E.&S. <u>Living stone</u>	E.&S. <u>Livingstone</u>
P38 図 19	(誤) 図 19 橈尺関節の関節包内運動 (右) a: 遠位橈尺関節の回外 b: 遠位橈尺関節の回内 c: 近位橈尺関節の回外 d: 近位橈尺関節の回内	
	(正)	

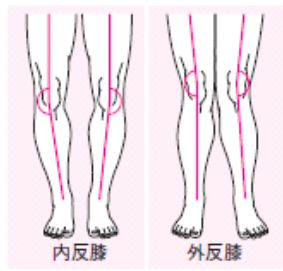
P39 上から 2 行目	近位橈尺関節では橈骨頭が<u>尺骨の橈骨切痕</u>に対して<u>凸の法則で動く</u>。<u>回内時は、橈骨頭が腹側に転がり運動、背側に滑り運動がみられる。</u> <u>回外時は、背側に転がり運動、腹側に滑り運動がみられる (図 19)。</u>	近位橈尺関節では<u>回内・回外時ともに</u>橈骨頭が尺骨切痕に対して<u>軸回旋</u>運動がみられる (図 19)。
P39 下から 6 行目	<u>内側頭・外側頭は上腕骨後面の下半分から</u>起始し、	<u>内側頭は橈骨神経溝部より下方、外側頭は橈骨神経溝部より上方からそれぞれ</u>起始し、
P39 下から 1 行目	起始・停止については <u>Lecture 5</u> を参照。	起始・停止については <u>次頁</u> を参照。
P40 上から 6 行目	<u>上腕骨</u>上部の外側に停止	<u>橈骨</u>上部の外側に停止
P41 下から 7 行目	骨棘形成は	骨棘形成は、
P45 上から 9 行目	<u>凹</u>の法則で動く。	<u>凸</u>の法則で動く。
P45 上から 10～14 行目	掌屈時には、橈骨の関節面に対して月状骨の関節面は<u>背側に転がり運動と滑り運動</u>がみられる。また、月状骨に対して有頭骨の関節面は同様に<u>背側に転がり運動と滑り運動</u>がみられる。背屈時には、橈骨の関節面に対して月状骨	掌屈時には、橈骨の関節面に対して月状骨の関節面は<u>背側に滑り運動がみられ、掌側に転がり運動</u>がみられる。また、月状骨に対して有頭骨の関節面は同様に背側に<u>滑り運動がみられ、掌側に転がり運動</u>がみられる。背屈時には、橈

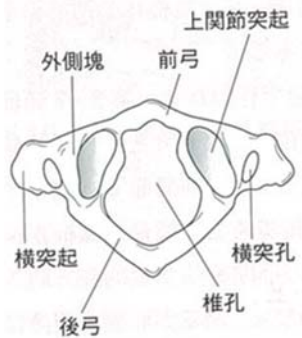
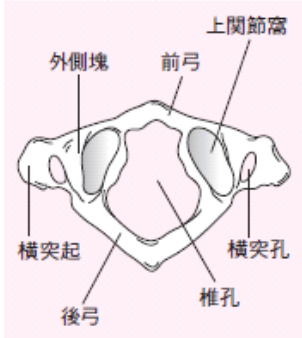
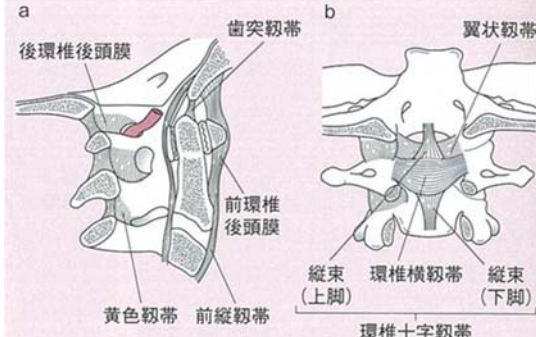
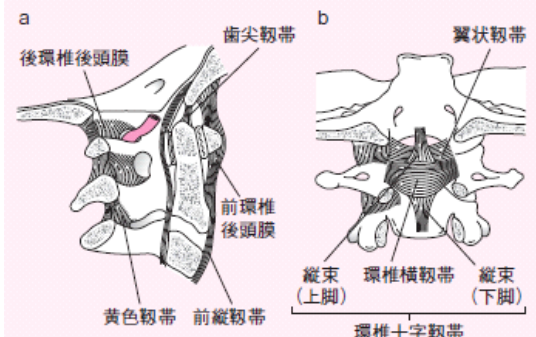
	の関節面は掌側に<u>転がり運動と滑り運動</u>がみられる。さらに、月状骨に対して有頭骨の関節面は同様に掌側に<u>転がり運動と滑り運動</u>がみられる (図5)。	骨の関節面に対して月状骨の関節面は掌側に<u>滑り運動がみられ</u>、<u>背側に転がり運動がみられ</u>る。さらに、月状骨に対して有頭骨の関節面は同様に掌側に<u>滑り運動がみられ</u>、<u>背側に転がり運動がみられる</u> (図5)。
P45 図5	(誤)  図5 手関節の関節包内運動 a: 掌屈 b: 背屈	(正) 
P46 上から19行目	上腕頭は、上腕骨 <u>外側</u> 上顆から	上腕頭は、上腕骨 <u>内側</u> 上顆から
P48 上から10行目	有 <u>鈎</u> 骨・屈筋支帯に起始し、	有 <u>鈎</u> 骨・屈筋支帯に起始し、
P53 1)	<u>正中神経麻痺</u>	<u>手根管症候群</u>
3行目	<u>手根管症候群</u> ：手根管症候群は、	<u>手根管症候群</u> は、
2)	<u>尺骨神経麻痺</u>	<u>ギオン管症候群</u>
7行目	<u>ギオン管症候群 (尺骨管症候群)</u> ：ギオン管症候群は、	<u>ギオン管症候群</u> は、
9行目	<u>尺骨管</u> 内で	<u>ギオン管 (尺骨神経管)</u> 内で
図2 ネーム, 図内	<u>ギオン管</u>	<u>ギオン管 (尺骨神経管)</u>

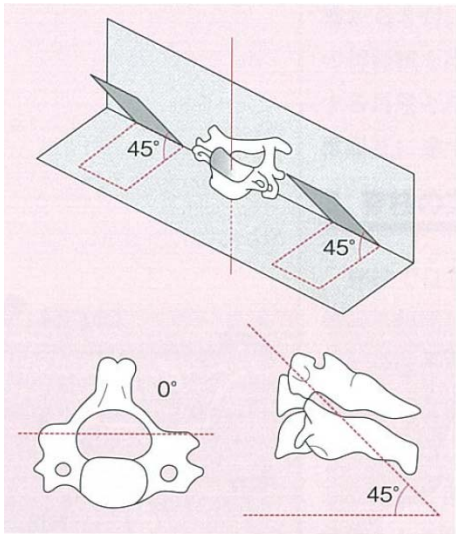
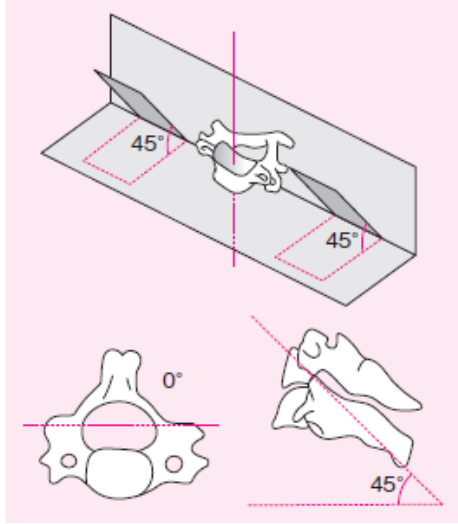
下から 15 行目以降	1) 手内筋劣位変形 (intrinsic minus deformity) <u>内在筋の弱化によって中手指節関節過伸展, 近位指節間・遠位指節間関節屈曲位変形をきたす。</u> 2) ボタン穴変形 (boutonniere deformity) 伸筋腱の中央索が断裂し、側索が関節軸より掌側に滑ることによって生じ、<u>近位指節間関節屈曲位, 遠位指節間関節過伸展位</u>を呈する。 3) スワンネック変形 (swan-neck deformity) 内在筋の拘縮や中手指節関節の屈曲位拘縮などで内在筋優位になると側索が背側に滑り、<u>近位指節間関節が過伸展する</u>。その後、二次的に深指屈筋の作用によって遠位指節間関節が<u>過伸展する</u>。 4) 槌指変形 (mallet finger) 伸筋腱の終始腱が断裂し、遠位指節間関節が<u>過伸展</u>を呈する。二次的にスワンネック変形をきたすこともある。 5) 母指の Z 変形 (Z deformity) リウマチなどによって手根中手関節の靱帯が<u>弱化</u>すると中手骨が背側に脱臼し、さらに伸	1) 手内筋劣位変形 <u>内在筋の弱化によって、中手指節関節が過伸展を呈し、近位指節間・遠位指節間関節が屈曲位変形をきたす。</u> これを手内筋劣位変形 (intrinsic minus deformity) という。 2) ボタン穴変形 ボタン穴変形 (boutonniere deformity) は、伸筋腱の中央索が断裂し、側索が関節軸より掌側に滑ることによって生じ、<u>近位指節間関節が屈曲位となり、遠位指節間関節が過伸展位</u>を呈する。 3) スワンネック変形 内在筋の拘縮や中手指節関節の屈曲位拘縮などで内在筋優位になると側索が背側に滑り、<u>近位指節間関節が過伸展位を呈する</u>。その後、二次的に深指屈筋の作用によって遠位指節間関節が<u>過伸展位</u>を呈する。これをスワンネック変形 (swan-neck deformity) という。 4) 槌指変形 槌指変形 (mallet finger) は、伸筋腱の終始腱が断裂し、遠位指節間関節が<u>過伸展位</u>を呈する。二次的にスワンネック変形をきたすこともある。 5) 母指の Z 変形 リウマチなどによって手根中手関節の靱帯が<u>弱化</u>すると、中手骨が背側に脱臼し、さらに

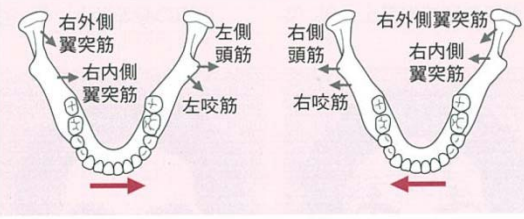
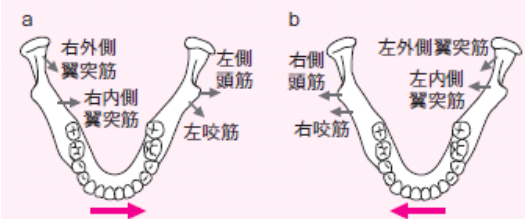
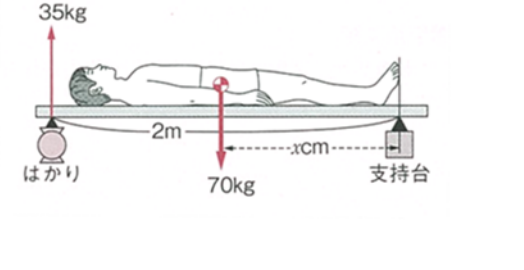
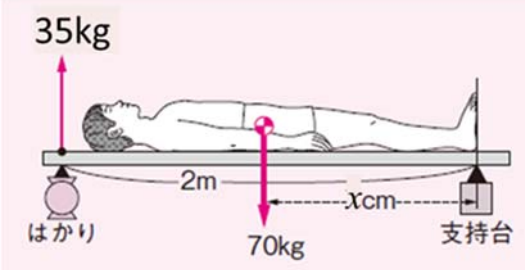
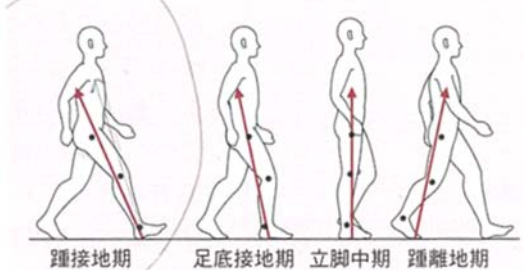
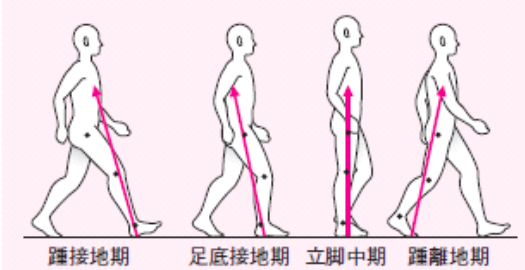
	展機構の転位などによって<u>中手指節関節屈曲、指節間関節過伸展する。</u> 6) 尺側偏位 (ulnar deviation) 中手指節関節の関節炎が生じると矢状索が弛緩し、指伸筋腱が<u>尺側に偏位する。</u>	伸展機構の転位などによって<u>中手指節関節が屈曲位となり、指節間関節が過伸展位を呈する。</u>これを母指の Z 変形 (Z deformity) という。 6) 尺側偏位 中手指節関節の関節炎が生じると矢状索が弛緩し、指伸筋腱が<u>尺側に偏移し、中手指節関節が尺側偏位 (ulnar deviation) をきたす。</u>
P54 2行目以降	1) テノデーシスアクション (tenodesis action) 脊髄損傷でみられることが<u>多く</u>、手指屈筋が麻痺していても手関節を背屈することで屈筋の張力を増し、物品の把持が可能であるが、手関節を掌屈すると張力が低下し、把持が困難となる。 2) 猿手 (ape hand) 正中神経麻痺によって生じる変形で、母指球筋の萎縮によって母指の対立運動が困難となる。 3) 鷲手 (claw hand) 尺骨神経麻痺によって生じる変形で、骨間筋・虫様筋などの筋力低下<u>によって</u>指の伸展時に、<u>中手指節関節過伸展</u>、近位指節間関節・遠位指節間関節が屈曲位となる。尺骨神経麻痺のみでは第1・第2虫様筋が正中神経支配<u>のため</u>示指・中指の指節間関節伸展は可能である。正中・尺骨神経麻痺では全指の鷲手変形がみられる。 4) 下垂手 (drop hand) 橈骨神経麻痺によって生じる変形で、手関	1) テノデーシスアクション 脊髄損傷でみられることが<u>多い</u>テノデーシスアクション (tenodesis action) は、手指屈筋が麻痺していても手関節を背屈することで屈筋の張力を増し、物品の把持が可能であるが、手関節を掌屈すると張力が低下し、把持が困難となる。 2) 猿手 <u>猿手 (ape hand)</u> は、正中神経麻痺によって生じる変形で、母指球筋の萎縮によって母指の対立運動が困難となる。 3) 鷲手 <u>鷲手 (claw hand)</u> は、尺骨神経麻痺によって生じる変形である。骨間筋・虫様筋などの筋力低下<u>によって</u>、指の伸展時に、<u>中手指節関節が過伸展位を呈し</u>、近位指節間関節・遠位指節間関節が屈曲位となる。尺骨神経麻痺のみでは第1・第2虫様筋が正中神経支配<u>のため</u>、示指・中指の指節間関節伸展は可能である。正中・尺骨神経麻痺では全指の鷲手変形がみられる。 4) 下垂手 <u>下垂手 (drop hand)</u> は、橈骨神経麻痺によ

	節・手指の伸展が不能となる。	って生じる変形で、手関節・手指の伸展が不能となる。
P58 表1 坐骨大腿靱帯 外転	<u>++</u>	+
P59 図9a		
P60 上から 20 行目	腸脛靱帯および大腿骨大転子に付着する。	腸脛靱帯および大腿骨殿筋粗面に付着する。
P64 サイドノート	<u>膝関節 (knee joint)</u>	(サイドノート 1 行目に移す)
P64 サイドノート MEMO	膝蓋骨がある (下図左) 場合と、ない (下図右) 場合に比べて	膝蓋骨がある (下図左) 場合 は , ない (下図右) 場合に比べて
P65 上から 6 行目	<u>外反膝</u> , 小さい場合を <u>内反膝</u> という。	<u>内反膝</u> , 小さい場合を <u>外反膝</u> という。
P65 サイドノート 図	<u>外反膝</u> <u>前額面における大腿骨と脛骨の長軸のなす角度が 170° 以下の場合. X 脚ともいう.</u> <u>内反膝</u> <u>前額面における大腿骨と脛骨の長軸のなす角度が 180° 以上の場合. O 脚ともいう.</u>	<u>内反膝</u> <u>前額面における大腿骨と脛骨の長軸のなす角度が 180° 以上の場合. O 脚ともいう.</u> <u>外反膝</u> <u>前額面における大腿骨と脛骨の長軸のなす角度が 170° 以下の場合. X 脚ともいう.</u>

		
P66 下から 5 行目	半月大腿靱帯内外側の半月板を	半月大腿靱帯，内外側の半月板を
P69 下から 10 行目， 下から 5 行目	2 関節筋	二関節筋
P70 4 行目	4) 股関節内旋筋	4) 膝関節内旋筋
P71 7 行目	<u>アンハッピートライアッド</u>	アンハッピートライアド
P71 (1)	(1) 前方引き出しテスト (<u>Anterior drawer test</u>) (図 1)	(1) 前方引き出しテスト (<u>anterior drawer test</u> , 図 1)
P71 (2)	(2) <u>Lachman test</u> (図 2)	(2) <u>ラックマンテスト</u> (Lachman test, 図 2)
P72 2)	後方引き出しテスト (<u>Posterior drawer test</u>) (図 3)	後方引き出しテスト (<u>posterior drawer test</u> , 図 3)
P72 下から 2 行目	外側に当てて，膝関節を強制的に外反させる。 次に，膝関節 30° 屈曲位にて <u>同様に</u> 行う。 <u>膝関節屈曲位でのテスト</u>	外側に当てて，膝関節を強制的に外反させる。 次に，膝関節 30° 屈曲位にて <u>同様に</u> 行う。 <u>テストが陽性の場合，膝外反方向への緩みがみられる。</u> 膝関節屈曲位でのテスト
P74 下から 10 行目	顆間関節窩は <u>脛骨</u> の形態に合わせて	顆間関節窩は <u>距骨</u> の形態に合わせて
P74 下から 9 行目	背屈に伴い <u>骨</u> 滑車の前部が	背屈に伴い <u>距骨</u> 滑車の前部が
P77 下から 2 行目	外転と内転はおもに横足根関節（ショパール関節）で行われ，正常では <u>20° の外転と内転が</u> 可能である。	外転と内転はおもに横足根関節（ショパール関節）で行われ，正常では <u>10° の外転と 20° の内転が</u> 可能である。
P78 2～6 行目	足部の筋は下腿に起始をもつ外在筋と足部に起始と停止をもつ内在筋に大別される。外在筋は下腿の走行部位によって前方筋群，外側筋群，後方筋群に分けられる (図 10)。足部の運動の制御に関し，距腿関節，距骨下関節の運動軸に対する筋の位置や距離によって制御する	足部の筋は，下腿に起始をもつ外在筋と，足部に起始と停止をもつ内在筋に大別される。外在筋は，下腿の走行部位によって前方筋群，外側筋群，後方筋群に分けられる (図 10)。足部の運動の制御に関し，距腿関節，距骨下関節の運動軸に対する筋の位置や距離によって制御

	運動が決まる (図 11) ①. 内在筋は足部の安定性や足趾の運動に関与する.	する運動が決まる (図 11) ①. 内在筋は、足部の安定性や足趾の運動に関与する.
P80 下から 3 行目	距骨	踵骨
P85 3～6 行目	(図 4). 椎間板は変形することで脊椎に可動性を与えるため～移動する (図 5). 椎体間を連結することで、～	(図 4). 変形することで脊椎に可動性を与えるため～移動する (図 5). 椎間板は椎体間を連結することで、～
P85 14～18 行目	の可動性に影響を与える. 一般的に関節面の向きが前額面に近いほど側屈に対する制動は少ない. また, 関節面の傾斜が水平面に近いほど前方変位や回旋に対する制動が, 垂直な関節面ほど側屈に対する制動が少ない. ただ, 実際には関節面の向きと傾斜が互いに影響し合うとともに, 椎間板の大きさなどが関与するため, 関節面の形状のみで単純に運動の許容範囲が規定されるわけではない.	の可動性に影響を与える. 一般的に関節面の向きが前額面に近いほど側屈に対する制動が, 矢状面に近いほど前後屈の制動が少ない. また, 関節面の傾斜が水平面に近いほど前方変位や回旋に対する制動が少なくなる. ただ, 実際には関節面の向きと傾斜が互いに影響し合うとともに, 椎間板の大きさなどが関与するため, 関節面の形状のみで単純に運動の許容範囲が規定されるわけではない.
P86 15～16 行目	巻末資料表 2 示す.	巻末資料表 2 に示す.
P87 図 10		
P88 図 15		

P88 図 16		
P88 5 行目	上位 <u>椎間</u> の下関節面が下位椎体の <u>上関節</u> に対して	上位 <u>椎体</u> の下関節面が下位椎体の <u>上関節面</u> に対して
P88 15 行目	対側の下関節面が前やや <u>前方</u> へと滑る.	対側の下関節面が前やや <u>上方</u> へと滑る.
P88 下から 12 行目, 下から 8 行目, 下から 2 行目	<u>主に</u>	<u>おもに</u>
P90 4 行目	<u>脊柱側彎曲</u>	<u>脊柱側彎</u>
P93 下から 7 行目	このような上部胸郭と下部胸郭の <u>違いは</u> ,	このような上部胸郭と下部胸郭の <u>運動の違いは</u> ,
P93 下から 4 行目	胸郭の <u>前後径増大</u> に作用し,	胸郭の <u>前後径の増大</u> に作用し,
P94 6 行目	内肋間筋の前方線維は <u>胸骨下方</u> の挙上にはたらくため吸気に関与する.	内肋間筋の前方線維 <u>も</u> 胸骨下方の挙上にはたらくため吸気に関与する.
P97 5~6 行目	腰椎骨盤リズムは, 骨盤と腰椎が同じ方向に回転する同側方向骨盤リズムと <u>対側方向骨盤リズム</u> に分けられる. <u>図 16</u> に <u>その一例</u> を示すが,	腰椎骨盤リズムは, 骨盤と腰椎が同じ方向に回転する同側方向骨盤リズムと <u>反対方向に回転する対側方向骨盤リズム</u> に分けられる. <u>図 16</u> に <u>一例</u> を示すが,
P99 図 1 最終行	さらに <u>変性</u> が進み, 椎骨のところどころに骨棘が形成されて安定する. <u>その結果</u> , 脊柱管は狭くなる.	さらに <u>進み</u> , 椎骨のところどころに骨棘が形成されて安定する <u>が</u> , <u>その結果として</u> 脊柱管は狭くなる.

P105 図 13 右図	 図 13 顎関節の側方運動時に作用する筋 a: 左外方への運動 b: 右外方への運動	
P116 13 行目	また, <u>協同収縮筋活動</u>としては,	また,
P117 図 15 キャプション	2: 前庭・体性感覚正常, 視覚<u>感覚</u>欠如 3: 前庭・体性感覚正常, 視覚<u>感覚</u>不正確 (筒を破る) 4: 前庭・視覚正常, 体性感覚不正確 (床が重心動揺とともに動く) 5: 前庭感覚正常, 視覚<u>感覚</u>欠如, 体性感覚不正確	2: 前庭・体性感覚正常, 視覚欠如 3: 前庭・体性感覚正常, 視覚不正確 (筒を破る) 4: 前庭・視覚正常, 体性感覚不正確 (床が重心動揺とともに動く) 5: 前庭感覚正常, 視覚欠如, 体性感覚不正確
P119 図 3		
P123 表 1 右のセル下から 3 行目	遊脚側下肢が<u>立脚下肢</u>を通過する期間	遊脚側下肢が<u>立脚側下肢</u>を通過する期間
P127 サイドノート 図		
P144 20 行目	筋収縮のためのエネルギーを供給する<u>ための</u>代謝システムが	筋収縮のためのエネルギーを供給する代謝システムが